

ギ―櫓の音すべてが盡ける詩とも言ふべきだ。
この美観こそ味つた事のある人でなければ誰もそれは想像
だもし得ないだらう。

初 秋 の 風

細 野 善 正

静風が立ち一雨毎に涼しさを増すとはいへ残暑きびしく、
山緑りに海青く道を行交ふ人の葉帽子やバラソルの日に反射
してまぶしく、避暑客の山より、海より歸郷するを厭はしく
思ふ等は夏の日と變りはない。

此の様に暑い初秋の午後一時頃一匹の馬が隣家の製材所へ
荷を運んでゐた。宇宙の萬物を皆焼滅してしまはなければ止
まなばかりの偉力を示してゐる太陽は、此の瘦せこけた力
に不相應な荷を積んだ荷車を引いてゐる駄馬にも、少しのあ
はれみも見せず焼けつくばかりに照してゐる。

馬車は田の如くになつてゐる、ぬかるみにはまつて貧乏ゆ
るぎもしない。馬子はいらだつて無暗矢鱈に棒切で馬の尻を
たたく。

て見る」と言ふ。これには何時も閉口した。

それでも小學を終へて櫻の咲く頃此のY中學へは入つたの
だから仕方がない。それも親父が道は遠いがS中學の方が受
験者も少ないしやさしいからと言つたが俺はひつかな聞か
かつた。「男らしくもないY中學がなぜ恐しいんだ。落ちた
らそれまでさ」と切り出してやつた「又無鐵砲な」と云ふ兄
貴は「實力がないのにそんな事を言ふな」我々の時代でよく
出来るものでも落ちたものだ」さん／＼言ふ「なかに男一匹
さ」と平氣なものだ。

ふと見ると小僧まで笑つてゐやがる。「てめいも同類だら
う」と思つて僕は驚いてぐつとにらめて書齋へ走りこんだ。

それに入學出来たのだからまあ鼻が高いわけさ。

毎日通ふとだん／＼中の様子が分つて来る。上級生の奴等
はいやに短かい洋服を着てすその開いたズボンを着用して居
る。中には大眞面目な人もある其の人々の別稱は「板」とか
猫とか言ふさうだ。前者が机にひつついて離れないと言ふ意
味で後が「しつこい」と言ふ意味ださふだ。これはずつと後
に聞いた。こんな事を言つて喜んでる奴はお目出度い人で實
につまらないものだ。

日は矢張り照り輝く。然し西方に一點表はれた雲は、遂に
此の偉大な力の所有者太陽を隠してしまつた。何處からか涼
しい風が吹いて來た。今迄死滅の境をさまよふてゐた駄馬に
俄に力づいた。一層力を入れた。車は動き出した。

何處かでこぼろぎの鳴聲がする。
矢張り秋だ。

無 鐵 砲

木 村 三 雄

俺は元來無鐵砲だ。

「まあよくも親父と反對だ」と何時も母から笑はれる。無鐵
砲のたゞりも恐ろしいものだ。小學の一年生に入學した當時
から教師に此の御子は餘程氣をつけないと駄目ですと云はれ
た。

それからと言ふものは學校がひけて家へ歸ると親父からも
兄貴からも勉強せめだ。元々やる氣がないから「ふんふん」
「解ける／＼」の連發だ。親父は「本當かい」と顔にしはをよ
せてのぞき込む。兄貴は人の悪い奴だから「もう一度暗誦し

毎日青インキを五六百もぶちまいた様な天氣だ。こんな空
は見えて居ても氣持がよい。此の炎天下で教練をやるのは一等
つらい。おまけに大尉殿の目はすごい。でも俺は平氣だ。膽
は小さくても思ひきりがよいからな。

講堂はいやに古びて居る全部黄色のペンキで塗つてある。
圖書の先生が暖色と寒色の極端なやつを代る／＼まぜると目
のさめる様な面白い色どりが出来るると云つたから俺は無鐵砲
に「先生」と立上つて「講堂の板を一枚一枚さうしたらどう
でせう」と言つてやつた先生は眼鏡のくもりをふき／＼「君
はなぜそんな事を聞くんだ」と問ふから「そりや先生講堂の
様に黄色なのは死や絶交を現はすからです」「さうかねよく
知つて居るね。まあ校長に話して来るさハハハそれは餘談だ
が」と言つて相變らず眼鏡をふいて居る、そしてほくそ笑ん
で居る。それから俺は一人で面白い人だときめ込んで仕舞つ
た。

修身の教師は非常な年よりで残り少ない前齒が長く突出て
居る。それで聲は大きく面白い人である年中着物を着て紋着
の羽織を着用に及んで居る。何時もステツキに程よさうな
鞭を持つて居る。「修身の教師がむち？」とよく生徒は噂を

する。よく不意に「高山彦九郎は長崎で外奴のヘナチヨコ劔を束にして日本の刀でずは／＼切つて驚かしたものだ豪氣だな、惜しむらくは天が彼に今少しの生命をあたへざりしを」とか「吉之助は久留米飛白一枚に兵児帯で御前會議に平氣で出て他の諸官に詰られたものじや」などとむちを巧に利用して話をやる。

何時も「俺は光風露月先生だ」と言はれる。

こんな先生に育まれて嚴の中にも諧あり規律正しく暮し卒業する者は幸福である。

それに世の中は妙なもので居眠りと飯を食いに來る醉生無死の輩がある事だ。晝食を食ふて授業をはじめるとどんなものでもつよい氣持になつて／＼する。中にはぐつすり眠込む奴もある。それでも終業の十分五分前になるとバツチリ目をさまして老小使がひよる松の下に現はれて「リン」を振るのを窓越しにながめて待ちかまへて居る。情けないものだ。親の血したる温かな學資をどう思つて居るのだらう。俺は居眠りはせぬが此の點は頗ぶるとまでは行かぬがやしいものだ。ちつと氣をつけよう。

こんな事に何時も何時も費やしてその内に三・四年と上つ

と苦い事。俺はグツと胸にこたへて「何處まで行つても同んなじだ」とこれにむくいた。

兄貴の奴五年前の事をまだ根に持つて居るらしい。いやな奴だ。かう思つて居ると五年前の自分が目の前にちらつく。兄貴も大きくなつて、反對に親父は大分歳を食つたと今更ながらもつく／＼感じる。

せちからい現世だ。これが人間界だ。あ！さてこれから何處へ泳ぎ着いた事やら？……

男一匹もかうなると鯛の腐つた奴よりまだおとる。俺は急に小さな聲で「あ！のつびきならぬい」とつぶやいた。兄貴は向ふで親父と茶を飲みながらにや／＼笑つて居る。

きつと心の中で「さまみろ」位思つて居るんだらう。

「畜生！」……

まゝならぬ世の中の出来ごととり／＼。

(六)

夏の朝まだき

組田 重 嘉

しのゝめの外面には、冷やかな氣持のよい微風が、草木を

で仕まつた。そしてどんのつまりに五年生に成つた。

早いものだ下級生が四學年あつて上がない。

五年生ぶりの發彈につとめる。

それで家へ歸ると全く頭が上らない。

その中に期待して居た夏休もすんで月圓く虫すだく九月になつた。古池に蛙の飛込む音に耳をすまして氣を取られて居る間にそろ／＼心配になつて來た。何がして君「卒業後の事さ」

それでもまだ無鐵砲さは去らない。その内親父がなんとか言ふだらうと思つてほつて置いた。

十月に入ると大分急がしい。僕はおかまいなしに「お父さん」「卒業したらどうして呉れるんだい」と遂に切り出した。

親父は五月蠅さうに「お前の考はどうだ。は入るならそれに應ずる仕度もいるし」「なに受験勉強なんかいるもんかい。學校の方を眞面目にやりやい／＼んですよ」と言つて、横を見ると兄貴はひじを枕にしてネクタイをいぢくりながら「お前は眞面目にやつて居るかい」とすかさず鋭劍急に短所をつく。僕は思はずたじろいた。

おまけに「中學には入つた時の様にそう安々といくものか」

靡かせて居る。まだ太陽は上らない。けれども東の空は紅に染つて、吹いて來る風も赤味を帶んで、和かにそして爽快だ。あちらの方から入道雲がむく／＼と起つて來る。土手づたひにだん／＼と濱の方へ歩みを運んで行つた。

夜明けなのに、いくつもの白帆が、朝風に帆を張り切つて油の様な湖面をすべつて居た。遠くかなたの白帆をながめた時、いつしか一幅の繪畫がそこに開けられ、ねぢはちまき甲斐／＼しく、赤銅色のたくましい腕に權を握つて、「えつさ／＼」と漕いで行く舟子の姿が、目のあたりにちらつき始める。

あゝ！あの舟子こそ、眞に大自然の風景によく接して、その深沈奥妙な美の精靈を握り得たものなのだらう。彼等は幸多き、恵まれたものである。舟乗りの生活には危険があるだらう。けれども、周囲ののどかなそしてひろ／＼とした景色に、感化されて、それらを超越してしまふのだらう。彼等の生活は、萬物に超越した、唯自然の風景にあこがれたものであるべきだ。しかしながら、彼等は隱遁者ではない。社會の一員だ。働かねばならない。金のために働いて居るのだ。けれども、今日——明日と生活難に追はれて居る都市の生活

よりも、如何に恵まれた、幸福な世渡りだらう。

東の空より、朝日は上り始めた。さわやかに、ほがらかに。真紅の光は湖水のさざなみに、小さく碎けてゐるのだつた。見る／＼内に、すつかりと山をはなれて、鮮かな緑につままれた農村の世界を照し始めた。植物を照し、動物を照し、無生物を照らす。圓滿な太陽の光りは森羅万象到る所を悉く照らす。朝もやも、だん／＼と薄らいで行つて多景島がほんのりと、見え初めた。對岸は、もやに包まれて見えない。そして天と水とが相合して、果てしを知らない。水平線のはても見えない。あゆの群が黒く／＼そして飛び上りながら泳いで行つた。漁夫のしづが家から白い細い煙が風にゆれずに真直ぐにゆう／＼と立上り始めた。間もなく網を携へて出かけて行くのだらう。湖畔にそびえ立つ高い工場の煙突から黒い煙を吐出し始めた。農夫、漁夫の姿もちらほらと現れ始めた。トイラーが自轉車のベルをけた／＼ましくも、鳴らしながら町へ入つて行つた。

かくて湖畔の村の朝は、靜かにほがらかにあけそめて行つた。

(一九二七、七、三〇)

手紙 (惱める友へ)

吉川文一郎

君、落付いて物事を考へることが出来る様になりましたか、本當に落付いて人生を考へて見て下さい。僕等はどんなに苦しくとも生きて行かねばならないのです。そして色々な苦痛を味はつて行かねばならないのです。殊に青春時代の僕等に對する苦痛は崇嚴なる感をあたへます。

僕等は其苦痛を、悩みを、總べてを涙と共に噛みしめて行かねばならないと思ひます。感謝しつゝ喜んで受けねばならないと思ひます。僕等は之を避けようとしてはならない。逃れようとしてはならない。生きて行く爲に喜んで受けて行かねばならないのです。

まして一時的の酒の酔に僕等は人生を忘れる事が出来ませうか。

一時的の女の美によつて生の苦痛が果して忘れ得られませうか。

暫しの酔によつて忘れ得た苦痛が、醒めて後の淋しさが前

にも増して強く感ずるのを忘れてはならないのです。本當に君自身の魂を見出して下さい。本當の君は此の夏見た君ではないのを僕は信じます。僕等は悩みそして苦痛を受けつゝ行く事はどんなに尊い事か知れないと思ひます。僕等は苦痛を避けて行く生活をしてはならないと考へます。僕等は悩みを逃れて行く卑怯な人生を人生としてはならないと思ひます。

僕の此言葉は現在の君に對して失禮にあたるかも知れませんが、もしそんなであつたなら僕は喜んでお詫びいたします。けれども此夏に見た君は、僕の想像はあたらないにしても、君が現在の境遇を不満とするの餘りに自暴的になつてゐられるのを見逃す事は出来ないのです。僕は思ひ切つて此書を差上ります。僕の眞心を汲んでとに角君の現在の意見を善惡なしに聞かして下さい、偽りのない本當の告白を。御返事を待ちつゝ筆を擱きます。

地 圖

ニツケルの盟を庭の楓の下に置き、井戸から眞清水を汲んでそれにインク壺を漬けた、壺から一點インクの凝塊が擴がつたかと思ふとそれが見る／＼水面に雲を描いて大きな世界

の地圖が浮き出した。アメリカは右の端に位し、露西亞と亞細亞の大きな胸體と、西歐のごちや／＼した凹凸を占める英國と、下端の伊太利などが不完全ながらそれらしく見える。薄紫の墨色の及ばぬ處は水色で、天の晴れ渡つた色がかつきり映る、それは太平洋であり大西洋であり印度洋であるのだ。

見る間に地圖は變化する、ちよいとした風が吹くと亞細亞の胸體に渦巻が起る、アメリカも英國も露西亞も動揺する、墨色は濃くなつたり薄くなつたり、伸びたり縮まつたり、一つの國が全然姿を消したり、其の代りに突兀として新たな國が現はれたりする。それは瞬も出来ない一刹那の出来事である。ペスピアスの噴火がボンペイを埋めたり、ナイルの汎濫が古きカイロを埋めたりしたのと同じだ。然り、ほんの一瞬間に世界が變化するのである。我等が天を信じ地を信じて住んで居る此の地球なるものは水に浮き出してゐる墨色の紋ではあるまいか。

かう考へると僕の心は暗くなる、僕は亦眞夏に東南の空に簇り出る雲の峰を見る時、世界の地圖を憶ふ。風のまに／＼崩れ行く地圖、そして其所に現はれる幻怪奇異な神將達や百

萬の裝甲馬や、夕日に輝く長鎗や黄金の楯や天軍の大格闘やそれから忽然として凡てが消えてなくなつた時の淋しさや、虹の平和が青天に架かり初めた安らかさや、一定しない心の動搖に僕は世界の果敢さを考へる。

それを考へる事は僕の樂みである。僕は其解決を必要としない、僕は結論を得たいと思はない、考へればいいのだ、感ずればいいのだ、小さな客臭い考や、針の尖で神経を突かれる様な憤慨がある時に僕は世界の地圖を見ると僕の心は廣々とした曠野へ突出される。そして僕の魂は僕の腹の底にどつしりと落付く。

僕の一枚地圖を壁に貼り付けた、だが世界は固定した印刷物で見ると銀盤の水に擴がるインクの模様や、天に簇がる雲の形で見る方が遙かに興味が深い。

秋の月

園 凌 然

夕食すみて田圃に出づれば、身の丈より高き尾花は、微風にゆられ、東の空が薄明るくなると時々雲間より顔を出し、

しつゝも雄々しく進み行く。はるか向ふの水平線上には煙たなびきて行くは、汽船は何處へ行く。あれは大阪商船で鳥羽を過ぎ名古屋へ行くのだらう。

一天雲なく晴れ渡れる碧空に、限りなき大海原を望めば宇宙の洪大無邊なるを思つて壯嚴に堪へがたい。

あゝ天然の美を獨り占むる海よ。我等は此の海を利用して大いに海外に雄飛して大いに大和魂の如何に進取の氣象に富めるかを試されます。

はるか向ふはアメリカ大陸か。

あゝ壯大なる海よ美妙なる海よ！

雨の夜

廣 田 萬 祐

靜かに雨の軒端に落ちる音が耳に入る。

誰か道を通るのだらう、雨が傘にあたる音が、近づいて又遠く何所へともなく消えて行く。

電氣の光がぼんやりと雨の中にもれて居る。

不意に何所からともなく犬の悲鳴が、けたましく聞えて

又叢雲に包まれる。

稍半時ばかりたつて、あの墨を流した様な黒雲も早や何處ともなく去つて尾花の微風にゆられる中に時々「いも明月」のすみきつた兎の宿が見える。

早や九時も過ぎたのか近くの家の時計の音が淋しく聞える俄に足もとに冷りと何かあつた。何かと見れば「すみき」の葉の露が散つたのである。

志摩の海

若 林 正 三

岩に碎けて散る大波小波、寄せては返し返しては寄するのを眺めては、如何に炎熱焼くが様な、夏の日の暑さも一時に忘れる。老松枝を交へて、海邊を涼しい風が、莫塵を並べて晝食の所へと吹きつける。

或は波の音をいみじき樂と聞きつゝ一日の遊を過すなど大變心地がよい。初秋にたなびく雲の絶間よりもれ出づる安乗岬、安乗の燈臺は白く輝きて天を突きぬけるが様である。

唯すつと向ふの海の彼方には小型の發動機船が上下に振動

直に又聞えなくなる。

時計が十時を告げる。

何と言ふ靜かな淋しい晩なんだらう。人通りもたまにしか無い。

さつきまで小降りであつた雨が、今は早や風をさへ交へて其の音すらさわがしくものすごい。

落葉の音が、如何にも秋を物語るやうに哀れに聞える。

障子に枯木の影がゆらめいて居る。

世は皆靜まつた様に今は全く雨風の音ばかり。

秋の夕方

向ふの屋根が赤々と輝いて居る。

鳥が彼等の巢へさして歸り行く。

山の鐘が靜かに夕方を告げる。

電氣がぱつとつく。人の足並もあはたしい。

すつきりと晴れた秋の空。今夕日は西の山に靜かに沈んで行く。

木枯が吹いて落葉が舞上る。

秋の淋しい景色にかうしたあはたしい夕方が、おとづれてそして又靜かに夜のとばりが下されて行く。

伊吹登山の一節

村川 文男

夏休も半ば過ぎた頃——其の日は二十二日だつた。僕は僕より大きい十人の旅連れと一緒に、夜の伊吹登山を試みた。

長岡に付いたのは日もとづくに暮れて、暗い——時であつた。驛から一人だつたらこわからう道を、大勢の元氣によつて賑やかに麓につくことが出来虫が時々鳴いてゐた時、僕は耳をかさずには居られなかつた。

十一時半頃まで麓の茶屋で一休みして、急な坂を元氣よく登りはじめた。始めての山！ 始めての登山らしい登山に僕の足は勢よく前方に——と進んだ。

山の道々では涼しい秋虫の音を耳にした。

頂上に付いた時はさすがにみなはつかれた。僕も随分とつかれた。霧が相當に深く前方はぼんやりかすみ茶店の灯がうるんで居た。蒸し暑かつた下界を脚下に今は涼しい、いや寒い位の此所にゐる時何だか仙人の住む所へ來た様に思はれ

た。そして僕は幼ない時から望んでゐた伊吹山も見事に突破したんだと思つた時愉快で——ならなかつた。石室には入ると寒さの爲に蠟燭を灯して居る人もあつた。出た所にあつた一軒の茶屋に入つてつかれた体を一時横たへる事にした。記念のスタンプを押して、ねようとしたがねつかれない。をぢさんが時々ひょうきんなことを云つて笑はせる。少しうつうつしたかと思つたらもう夜明けだ。日の出をおがもうと東を見ると、雲がかゝり其の雲が又何ともいへぬ色に輝いて居た。桃色、紫色にかゝりやいてゐた。下方から霧が湧いて來てそれを風がさ——と吹き上げて、非常な美觀をさへぎつたのは残念であつた。

下を見下せば海の様である。洋服はぢつとりしめつて居て寒い。再度雲が輝いた時は前よりもつと美しくかつた。音さんが「天下の絶景だ」と感歎の聲をもらしなかつたが、すぐに美しくしさはなくなつた。日の出ももう見られないとあきらめて香りのよい百草の咲き乱れてゐる間をふみ分けながら、元來た道を愉快に下山した。

わからない算術

小林 利二 昌

わからない！ わからない！ いくら考へてもわからない書いてはけし、けしては書くがまだわからない。エンピツが打れる、紙は破れるがやはりわからない。「めんどろくさい次のをやれ」と、やつて見るがなほさらわからない。しかたなしに前のを又するがわからない。

外の事に氣がとられるいよ——めんどろくさい「えと明日にまはせ」と、言つて外へ出た。

九月に近い或夜

清水 正義

昨夕の事であつた。兄さんと散歩がてら隣村へ買物に行つた。村を出て田の中の一途道を歩いた。生温いそれでいて何處となく冷りした風が吹いた。さつき迄西の山の頂がくつきり見えていたに急にあたりが暗くなつて星が一つ二つと次第

にふへて行つた。黒い雲が頭の上を靜かに通つて行つた。道の左手にある林の木々の枝はゆれてゐた。

「二百十日も無事にすぎればよいが」

と兄さんがつぶやいた。

買物をした後又もと來た道を歸つて來た。家々の燈は闇の中にうるんで見えて居た。

雨後の眺め

松宮 實

しと——と降つた小雨も何時しか止んでしまつた。向ふの山にかゝつてゐた白雲が東へ東へと走つてわれも——と山を離れる。後には洗つた様な樹々の緑が日光に輝いてゐる。逃げ遅れた雲のかたまりが、少しばり山の頂に残つて離れやうか離れまいかといふ風にためらつてゐる。

やがてそれも行つてしまつた。

田圃の方を見ると、畔道に蓑を着た農夫が牛を曳いて立つてゐる。之から田を鋤きにかゝるのであらう。向ふの杉の木と百姓家の間にうまきはまつて、まるで繪に書いた様だ。

「バタ／＼」羽音のする程群をなして来た雀が、庭の松の木にとまつた。松の枝の露がばら／＼散る。ふと見ると、軒ばの上の方の空を、鳶が輪をかきながら飛んでゐる。やがてすつと向ふの國道を越して川堤の方へ飛んで行つた。うつとり見とれてゐる途端時計が十一時を打つた。もうやがてお晝だらう。

縁先の方に目を移すと、手水鉢の向ふからすつと枝を出した紅葉の一枝の葉に、青蛙が一匹休んで居る。葉の尖の方には真白の雨の玉がぶら下がつてゐて、時々ぼたり／＼と白い光を引いて落ちる。「と／＼」と／＼と鶏を呼ぶ聲に、はつと後をふり向いたら、芋の葉がゆら／＼と左右にゆれてゐた門口から蛇の目の傘がボツと出て来た。妹だ。籠の中に豆腐の入れたのを持つてゐる。

僕が何の氣もなく空を眺めた時には、あちらこちらにちぎれ雲のみが残つてゐた。西の方の空には、山から山へ渡した様な虹が出た。

日がきら／＼と照り出した。そこら中の物が一齊に光を放つ。空は全く晴れて。青空になつた。

清らかな朝

目が覺めた。昨夜早寝をした爲か、馬鹿に目がぱつちりして居る。時計はまだ五時を過ぎて居ない。がもう外は明るいものだ。寢ようかとも思つたが眠くもないから朝顔を見に行ぐ。ぱつと戸を開けると、さつと明るい清らかな氣が部屋中に漲る。流石に朝は清々さつぱりして居る。

赤・しほり・紫・白等種々様々の美しさを思ふ存分花辨によつて現はした美しさは、僕の心をうつとりとさせる。城山は相變らず悠然と其の姿を表はして、其の天守閣の頭に點々の黒い物が五つ六つ集つてゐた。「多分鳥だらう」。思ふ間もなくぱつと飛立つた。

流石の夏も朝は涼しいものだ。何處からともなくそよ／＼とすが／＼しい風が吹いて来て、庭の木の葉を小さく動かしてゐる。丸で極樂のようだ。

「氣持がよいなあ。」

僕はしばらくうつとりとしてゐた。

——一九二七・七・三一——

暑い日盛

吉原 茂

「チツチツチツ」……………「チツチツチツ」……………

……「チツチツ」……………

しばらくの間を置いて、するどい燕の聲が聞えて来てだるい、眠りたくなる様な僕の頭を針でチク／＼とさす様だ。体の皮を取りのけて、冷たい氷の中に飛込みたい様な氣がする向ひの屋根は鱗の様に日の光を反射して、僕の油を絞り取つてしまふ様だ。遠くの土手の蟬聲さへ聞えて来る。折から目の前を燕がす／＼と身輕に飛んで行つた。心がす／＼となつた……………と思ふ間もなく、いやな自動車の音、下駄の音、荷車の音、思へば思ふ程、聞けば聞く程暑くなる。玉の汗がのどを傳つて流れ、手ぬぐひを離す暇もない。今握つた許の手に早や汗がじみ出て居る。ねむたい様な氣もして来る。氷の礫でも降つて欲しいなあと思ふ。ふうしつと深いため息をついた。

「たら／＼／＼」。

又汗がにじむ。

——一九二七・七・三〇——





長 詩

夢の曲

鳥生新生

うつうつと
 墮るき春陽のおとづれて
 視よ 怖ろしき毒蛇土穴を出で
 草葉の影に閃めくは
 鋭き眼光 紅蓮の尖舌よ
 藻をくぐる魔性 海蛇のうねり
 毒氣地に満ち 魔夢天をかすめば
 萬象痲痺れ
 妖艶凄き精氣に酔ひしれ
 されば
 鼻をゆすぶる怪しの薫香

何方よりかたどよひ來れば
 睡蓮の花辨 ひらとこぼれ
 奇怪しや 常夏の樂園展開け
 いぶかしくもほのぼのと舞ひて出づるは
 白孔雀
 銀の翼 眞珠の文雲 妙に乱れて
 五彩の虹の我をおとなへば
 あな あはれ又
 夢の人となりて惱まし春は酣
 夢に遊び 現實に嘆く若人の
 春は實にいたましよ なつかしよ
 されど されど
 今は逝にし春を顧ひつゝ

過ぎこしの夢を憶びつゝ
 あな
 覺めて淋しき現實の晩春よ

目覺めの曲

山陰に あはき哀愁を求めて
 落葉を歩まんか
 日々に かぼそき虫々の音に
 無常と悲戀の嘆きを聞くか
 されど 若者よ

天 たからかに澄み
 蔭 ほがらかになく
 されば
 纏はり来る妄想をはたき落し
 癒へ難き感傷の涙をはらへ
 さて 秋晴れの野に
 すこやかにせのびせよ
 さはやかに呼吸せよ

長 詩

かくて 玲瓏の歌
 自ら 四天にとどろき
 鬱勃の衝 我にかへり來る時
 男々しくも 蹶起
 さて 汝が把るべき 鏢を視よ
 明月を浴びて
 理想きらめき
 愛、映ゆ

散文詩二篇

高祖 保

郊外風景

碧天のはてには登氣樓が浮いて見える
 おれは乗り飽きたので市街電車をすてた、そして梨畑や桐と
 冬櫻の多い山脈のやうな郊外へ節をひるがへした、秋である
 廣つばではひつくり返つて空をみた、なるほど嘘のやうな秋
 である

秋、冬櫻の濤のはてに輕氣球のやうな白雲

さへく〜と澄んだ野末の空氣は水だつた、粘土細工もどきの文化住宅、それから立ちのぼるひとすじの煙、塘下竹林の蔭では油の欲しい肌さむい鴉の咳がきこえる、おれは涼しい薄荷をなめて口笛を吹いた

丘上小學校の咿唔と自動車の警笛と田園詩人と

獵銃の音に逃亡する狐のやうな野暢と惻かな農夫とおれの心情はそれらを豫覺する青い感度器だつた。

秋の風鈴

りんりんと鳴りの間のびのした秋の風鈴

軒檐の蔭あひに挽茶色の土耳其帽が動いたと思つたら、笹鳴きのする、鋭い秋の逆光の中へすいと消えた

石手洗に落ちる、靜かな寒竹の影

玉川砂利、アスパラガス、土人形、そして利休燈籠、閑寂な十姉妹の止り木を敲くおとがする

爛やかな影を描いて廻轉しながら、見るまについ〜と石くれのやうにこまくなる秋の鳥、柿大樹のてつべんでは、走

りを過ぎた百舌が囁んだやうに啼く

ゆるやかに鳴る風鈴 日だまりの冬櫻

糸ほどの愁を帯びた爪はじきの音と遠い午砲の響聲と、ぐいと遠のいて、空のはすれに晝の月がうすい。

人生場裡

中川源作

罵聲と争音との

人生の闘争場裡に

藝術に

信仰に

戀愛に

黄金に

腕力に

それぞれ人生を求め様として

威壓

嫉妬

憎惡

反抗に

同じ瞳を異様に光らして

葛藤の中に生命を續け

そして一齊に

一步一步

死に急いでをる人々よ

生を同じゆうし

死を同じゆうする者が

生……死の

短かき人生を

血みどろの闘争を續ける

白刃の閃き——赤血逆り

闘争の永續——魂を奪はれ

疲勞したる肉体——吐息をもらし

青ざめたる顔を地に俯し

恐怖の念に死したる肉体を振るはし

今更闘争を嘆けど

そは斷末魔の呻きだ。

ざんげ

あふれる涙を

こすりつけ

日記帳にこすりつけ

三角の公式を暗記した心は

中學生は顔をゆがめ

どかんと

空に爆彈のけはいのひびき渡れば

ざんげはすい〜と天に昇る。

希ひ

竹中 正

天地の總てを美しく感じ

邪念も夢想も許さぬ境に

只獨り油臭いカンバスを擔いで

徘徊して見たい。

假令身は路傍の土塊に化するとも

そが藝術への正しき精神ならば

涙の出る程嬉しい。
藝術の絶對境！
あらゆる天地自然
それ等はどんなに美しからうか。
堅いチューブで満足だ。
古カンバスで結構だ。
只暫くの間でも
眞實の美を感じ得る純情の境に
流浪する
これが私の希ひなんだ。

(八・一八)

郷土を想ふ

埴土の賤屋よ
搖籃の破屋よ
あゝ純情はこゝに湧く
憧れの土の香
總ては思ひ出の「スカートホーム」だ
我遠く此地學都に在りて
洋々銀河の流れを瞰ては

懐しのふるさとを偲ぶ
人知れずこぼるゝ涙
父よ 母よ 弟よ 妹よ
公園のベンチは冷い
我が魂は遙か雁山の中空に飛ぶ
今昔の懣
我が胸裡の果敢無さ
夜氣の次第に冷え行くも知らず
只獨り過去の廻想に耽る

(八・一八)

人生の醜惡相

轟々と異様な響き
列車は今箱根隧道を通過中だ
三等客車の暗さ
蒙々たる煤煙は生臭い人いきれを含み
天井の電燈は嫌にギラ／＼目を射る
醜惡な男女の姿
彼等のだらしない影姿
男は足を網棚に向けて倒立姿

女は胸を擴げて乳房をほり出してゐる
何と云ふだらしないさだらう
陰慘な淫らな貧民窟の姿
彼等の青白い息が葛藤する
あゝあの恐ろしいどす黒さ
陰慘！ 淫奔！
人間生活の裏面
何と云ふ醜惡！ ぶき味さだ
グロースの素描よりも猶深刻だぞ。

(八・二四)

憧れの森

澤田勇二良

赤々と陽は森におちてゐる。
小鳥は囀り巢にかへる。
蜘蛛の網は七色にピカ／＼光つてゐる。
さも惜しげに陽は笑つて下りて行く。
陽はおちた。
空の青い窓からは涼しい星がのぞき込み流れの上にお
どつてゐる。

雲 雀

宗 宮 復 一

雲雀はうらうらと啼いてゐる。畑は麥青く萌えつゞく。山は
緑で掩はれてゐる。湖の水は漫々として鈍き眞珠色に輝いて
ゐる。おゝそれは實に遠き世紀を思はせる。人類の過去は青

空の中に煙り消えてゐるやうだ、雲雀は再び草原に降りた。

◆
しばし今、沼の對岸を白煙をあげて汽車が通つて行つた。

おゝ現代よ、文化よ、

都會に於て田圃に於て人間はどれだけ幸福であり得るか――

――人類は永遠にさまよふ――

かくも雲雀にうらうらと啼いてゐる。

浮世

新しき人は生れ、古き人は逝く。これは人生の常の道である。されば逝くもの、かくのごとき哉。

洋々たる水の流れすら、行きて歸らざるものは感傷の種子である。まして逝く者よ、かくて歸らざる人よ。そこに滅びるものゝ前に、長く寂しい、悲しみの涙がある。

◆

あゝ、夢だ、夢だ――

人生はさびしい夢ではないか。

一度生るれば、今度は永遠に消えて行くのだ。

何と言ふ淋しさだ、幾ら意張つたとて、幾ら學者ぶつたと

やがては賑はふ水浴みの濱邊にて。

別離哀情

漢 見 覺 了

我れ今ここに

生まれきて

何をか、なせし

幾年の

過し月日を

惜しむなり。

父の教へに

育てられ

母の慈愛に

はぐくまれ

この世に受けし

十有九

何をか、なせし

恥かしや。

父の教へ

長 詩

て、それは一セコンドの夢に過ぎないんだ。
噫、宇宙の神秘さよ――

海邊の朝

原 友太郎

朝霧ふかき黎明の窓のほとり

靜かに旅舎の椅子に倚れば

雲のあなた――なつかしき故郷か――

靜かにも漂ふ我が夢の、姿よ。

晴れ行く朝霧に日射しもまぶく

靜やかに音もなく集ひよる千里の浪

打ちては返す長き濱邊に――

疊れる夢は今ぞ晴れたり。

遙かなる沖に白き帆二つ三つ

漁りの船か淡路通ひか

目視す此方に白き海鳥

夢の國より迷ひ出でしか――

母の愛

唯身をつくせと

教へたり

されど此の身

何なせし。

憶へば遠き

十年の

八歳の春に

受け初めし

學びの園の

師の教へ

今又ここに

盡せよの

情けも深き

師の言葉。

されど

父母の慈愛

師のおしへ

空しく受けしか

五尺の身
たゞ肉塊に
すぎざるか。
嗚呼！ 又憶へ
我が一生の
いまだ半ば
過ぎざるを
我れ今ここに
なつかしき
恩師の下を
去るにのぞみ
かくと誓はん
盡さんと
我が生命の
ある限り
誓ひは忘れし
盡さんと。

醜い現實なのだ。

夜・月・星

松宮定次

夜は何故こんなに静かなのか
月は何故こんなに哀しいのか
星は何故こんなに淋しいのか
青い夜空を望み
つめたい月を眺め
瞬く星を顧れば
針の様な鋭い神秘は
悩ましきまでに胸をつく
あゝ 深い夜の寂寞
夜空に唯一つ打明けられた天の小窓
闇に浮ぶ靈魂の煌き
神秘でなければ何か
不思議な自然の妖術
人の魂を奪ひ去る魔法
夜、月、星、神秘

嵐吹く夜

大中威雄

陰鬱な夜――
木立を泣かせて居る
悪魔の様な嵐の叫びにおびえながら
しきりにペンを走らせて行く
佗しい人影
.....
真夜中を報づる時計の響が
冴え切つた死の空氣を顫してゐるのに
おやすみおやすみ――
身体に害ですよ.....
夢から醒めた
優しい母上の聲がするのにな
赤い血の様なラインは
なほも刻々つゞいて行く.....
これが私の姿だ

あゝ.....。

悲しみ

月の淋しく照る夜
我れ橋の欄干に
身をもたらせて
思ひ悲しみぬ。
そは
月光を浴びる我が身の
月の光に較べて
あまりに見悪く
空を仰ぐ我が身の
壯嚴な月に較べて
あまりに小さき
悲しみなりき。

青草を刈る

北村彌一郎

今日一日で草刈り終る畑に、

露滋くて袖さへぬれ

右手に鎌を持つて立つ

私は情けなき奴隷であらねばならぬ。

さもあらばあれ、

「弱きものは我なり

小さきものも我なり」とは

誰がいふか。

見よ。此の右腕の鎌を、

青草は薙ぎ拂はれて

中空に飛ぶか、地に俯すか。

さもあらばあれ、

「強きものは我なり

偉大なるものも我なり」と

誰がいふか。

私は今日まで六日、朝は六時に

神が青草に恵みし露を蹴ちらし、

城趾なる此の畑に来て

弱きものの命を取つた。

弱きものよ、汝の名は青草なり。

強きものよ、汝の名は自然なり。

嗚呼私は弱きものにもあらねば

強きものにもあらず。

されど、此の手にほふられし青草よ

私は泣くに鎌持つ右腕は頬にあてられ、やがて打ちは
なされる。

「涙は中空に向つて飛ぶ。」

弱きものゝ身を思ふてこそ。

強きものとなれ、強くなれ。

弱きものをしひたぐは強きものならざれば

此の身よ、過ぎし日の小さきわれを忘れ

新しく強きものたれ。

嗚呼されど如何にすべきや。

一とびにとんでしまふ。

追想のまゝに

林 俊雄

そは

校庭の芝草が青々と燃え出せし頃

溢るゝ歡喜と溢るゝ希望の恵光に

春の日に照さるゝ新着の服のボタンに輝き

物珍らしき講義を聞きて

物むつかしき本を學びて

憧れの校門を叩けば早一年はたちぬ

○

そは

雲に聳ゆる白山の校歌を 口吟みし頃

高き理想に到達せむといそしみつ

嚴冬膚さす北國の冬の朝まだき暗中に

雪のあかりに途をたどりて

冷たき養浩堂に汗を流しつ

慕はしき校門を叩けば早や二年はたちぬ

土

つまづきさうな砂利の山路を

秋蟲は、長い後脚ではねてとんでしまふ。

とげのある細長い葉はかさかさいふけれど

矢の飛ぶやうに時は過つけれど、

此の山の麓で、

自然の愛が埋れた赤土と黒土とに見入つてゐると

葉末から落ちる露にさへ涙が流れる。

ほろ／＼と涙は

土にまみれた手の上に露のやうにおちる。

秋蟲は長い後脚で、

つまづきさうな砂利の山路を

そは

破れし四角な兵隊靴を 引摺りし頃
残雪溶けぬ伊吹の山道重たくふみて
健脚を誇り男の中の男たれと叫びつゝ
摩り切れしズボンも脱がで
泥に塗れしゲートル穿きて
故里の校門を潜れば早や三年は去りぬ

そは

湖東の地にも秋初風のソヨ／＼と 訪れし頃
水清きあの琵琶の水面にボート浮べて
陽暮るゝ迄も友と語れば水鳥に驚かされし幾度ぞ
船底たゞく波の音にも
水切る冷たきオールの音にも
思ひ出の校門を潜れば早や四年はたちぬ
○
かくとして
想ひきたれば泡沫の

雨の消息

曾我繁三

薄暗い朝の、閑寂の中を、
涙に潤ふ悲しい雨は、
濁流の渦巻へ、車轍の凹みへ
生ぬるく物うげに歩みをはこぶ。

甘く湿つぽい空気を吸つた雨の朝、
醒めたる停留所前の電燈の瞳は、
淡く照り、淡灰色の泪に吸りなく、
あゝ泪にうるほへる朝の淋しき静默。

唯かの心はあらぬ悲しい音を立てゝ
沈黙の小町をつゝむ、薄暗い曲の
一ふしに纏れつゝ河岸の、
なやましい、絨氈の中を
悲しきしぶきにぬれながら
淡明の町をさ迷うて行く……………

夜の訪れ

吉川文一郎

夜は来た
眞紅の血を幾重にか流して、日は西山に休息した。
遠い山の頂にエメラルドのやうな星が一つ地上に瞳を向けた
頃清涼寺の晩鐘が隅なく響き渡つて森も人家も凄然として起
立した。

遙か地平線の彼方に魔物のやうな一塊の黒雲が靜止して動か
ない。
黙々、鬱々、陰々、夢幻！
嗚呼寂寞の大氣を揺がす一陣の風を持たない。
森の影に、暗黒の夢を沈めて横はつてゐた池の最底の果に、
無數の星がかすかに或は澄明に煌めいて天と地と淡き光を交
又した。

空に銀河の流れて
冷たい幽光と共に十分の濕氣そつと降して來て、地上をおし
包んでしまつた。
訪ずる薄明の平安！

なぎさ

組田重嘉

波おさまりし
夕べのなぎさ
白帆はもやに隠れ

飛鳥は巢に歸り
小魚群なす
夕暮のなきさ
彼のベニスの夕べも
かくの如きか
月かげくなく小波
荒れ狂ふ怒濤
船をも呑み込む
狼牙の大濤
晝まのくるひ
夕べのけ靜さ
あらゆる波に洗はれ
試練さるゝ
このなきさ

炎天下の農夫

吉田 穰

やけつくやうな眞晝の田に、
裸身一つで働く農夫。

日にやけて眞黒になつた皮膚、
錨の如き漆黒の色、
それが彼の肉體美、精神美だ。

堅實な

素朴な

黒い農夫。

黒びかりに光つた肉一塊、毛一本、
すべて盡す肉、國に殉ずるものだ。

無言の土と、

はてしない大氣を友に、

黙々として

土の香に親しむ農夫。

收穫の日の樂しさを胸に浮べて。

濱邊の夕

夏川 省吾

西の空よ 西の山よ

すべてが紫色とかはつてゆく

今に太陽が沈んだなら

天地は暗く

さびしくなるであらう

西の海には

かすかに見ゆる

漁船

白帆に風をはらみながら

西へ／＼とさがつてゆく

西の海には

金と銀とのさどなみに

漁船も黄金の船とかはつてゆく。

夏の暮れ

平野 寛

いま日は西山に没せんとする

あゝ今日は何と暑い日だったことか

さう誰かが吐息をついて云ふ。

太陽の名残りの光を受けて

秋

飯村 天祐

私は書齋をきれいに掃除した

茶も湯呑みもお菓子も用意した

今日は誰か来ないかしら？

でも来る様な氣がしてならないのです

そして窓をあけて一しきり

誰もこない道を

茫然として眺めてゐた――

秋が来た

眞白かつた大空が
段々青く變つて行く

夜は月影に朗々として
虫が鳴き始めた

秋がきた様な氣がする

窓をあけて眺めてゐたら
あたりを歩るいてゐた清い秋が
秋の胸にころげ込んで来た――

一輪の花

園 凌 然

卓上に淋しく一人残されし
一輪さしの白い花
香ひも出さずうつむいて

しほれるまゝにしほれゆく
卓上の隅つこに残されて

何時ぞの事を思ひ出し
香ひも出さずうつむいて

しほれるまゝにしほれゆく

隅つこの一輪さしの白い花

何時になれば咲くのやら

淡い電氣に照されて

つぼみのまゝで美しく

隅つこの一輪さしの白い花

側の友は何處に

淡い電氣に照されて

淋しく散つてしまつたのか。

偉大なる母

木村三雄

母と無邪氣な幼子
それ程美しくて神秘なものはない。
健やかにすや／＼と母の愛を受けて……

湖畔の朝

土田敏雄

冷い静かな朝の空氣が流れてくる
美しい湖畔の朝だ

夏だ 夏

せみが静けさのなか／＼

じいじい鳴き出した

太陽が上つた美しい金色の

光りがゆら／＼と湖面の上に踊る

沖の方に帆船が一隻漂ふてゐる

夏だ 夏

しづかな湖畔の夏の朝だ

人

小林利二昌

たくさんの人が歩いてる
洋服の人和服の人
いろ／＼な着物を着て
いろ／＼しやべりながら
廣い公園をあるいてる。

ADVANCING WITH THE GIANT STEPS

英

T. Takenaka

詩

We are great and strong,
Because we have invincible giant forces.
Against our immortal lives,
Who can despise us as the weakest thing!
How can it be convinced
That we are inferior to any other existence!
We must avoid those people,
We must nay those terms,
And never forget to be the greatest things.
Let us advance forwards with the giant steps.
"Life is the Victory, Life is the Conquer,
And ever the Reality itself."
I should repeat.....

七

(附記) 勿論 Intonation なんか無關心だ。只作つて見たい慾に驅られて試作した迄だ。他に用はない。
併しスチブンスンの夢の空とホイットマンの野生とはどつちも好きだ。

THE MOON-LIGHT IN THE EVENING

英

T. Takenaka

詩

I remember, I remember.....
It was a slight and silent evening
When a round moon shone me above
Twinkling faintly in the silvery circle,
And my pale eyes also trembled cooler and drier.
Oh, now, late-autumn!
Gazing every leaf rolling on the ground with busy strides,
I tried to listen those sounds of Nature.
My heart was lonesome,
For I could tell you the grief of the season.
Caressing an innocent mind in bosom,
I looked up the heaven again.
Then flake-clouds hurried over the moon
And the cool wind patted me on my cheeks.

七〇



短歌

五月雨

一人はも思ひ寄るべき人はなし黄昏さむき水郷の春
われひとり書齋に居りてもの思ふ身とはなりたり十七のくれ
五月雨の音もかそかにてわがむろの夕べの神に燈かゝぐる

北村彌一郎

たそがれの色

きりぎりす鳴くやこの日も山あひの色にうもれて冴ゆるそのこゑ
角笛にこゝら夕べの靄立ちて山あひの色は日々とかはらず
ぬくもりて夕日の屋根ゆおり集ふ鳩は迷はず今日もかへりし
たそがれて裏山かげの巢にかへる鳥羽ばたきて森をめぐれり
水鳥の水かく音か朝靄の沼の蘆地に消えつきこえつ

ADVANCING WITH THE GIANT STEPS

蜀黍畑の香・茶のゆげ

炭ふけばはじく音たかし小火鉢にたうもろこしの香こそ匂へり
日盛りの道をかへるにもろこしの香ほのかにさまよひ來るも

月夜

涼風は月をはらへりむらくもの過ぎゆくままを仰ぎゐたれり

宗宮復一

小春

友の家を尋ねあぐみて田の畔に腰打かけて遊糸を見る
人々は沈みてとほる日の旗も重げにたるる諒闇の春
武蔵野の天地に伸びし高粱の葉づれの音をいちづに慕ふ

深尾喜陸

病みての後

いたつきは久しきかなや今日もかも初めて風呂に入るがたのしさ
初風呂の湯にほの透きて細りたるわが身をみつゝ靜かなるかも

山岸巖

静かなる小夜更けの湯にひたりつゝおのが細けきからだみてをり
病みこやり久しきまゝにわが腕もひざもあらはに細りたるかな
わが膝も細りて腕のそのごとし長くも病みてこやりたりけり

旅の空

漢見覺了

湖こへし彼方の空に月出でぬ我が家の人も眺めぬつらむ
村人に貰ひし番茶の香も高く旅の一夜を話し合ひけり
ひさびさに濱邊の水に汗洗ひ松の小陰にからだ干したり
雁といふ友の聲さへ身にしみぬ初秋の夜をさまよひ行くも
夏の夜は星ばかりなりいづくをか我が故郷の空とさだめむ

晩秋

中田實

小夜更けて聞く蟲の音を寂しみとくれゆく秋をなげきつゝゐる

涼月

藤野知三

雨晴れて雲間にむする月かけはぬれ葉に照りて涼しくは見ゆ

秋

平野寛

朝早く床をはなれて出て見ればこづえ高きに百舌の鳴きゐる
今宵また机にもたれきゝにけりこほろぎの聲いとあわれなる
月いでて虫の音多きくさむらに吹くかぜ涼し秋となりたり

秋

川澄健一

夕日をば浴びしお城の上空に鳶の飛び交ふ秋のゆふ暮れ
伊吹山はるかに見えてこの朝は空さわやかに秋とはなりぬ

西ぞら

清水正義

西そらに陽はかたむけり風出でてさざめく藪の笹葉ききをり
洗面器持ちて東をながむれば松の林は眞赤にそまる

月影

原友太郎

月乗せて梢はなるゝ一葉かな
野に立ちて聞くや月夜の遠砧
長居する母の留守居の小半日
里に住みて寢覺寂しき水鶏かな
瀧口に登る小徑や姫小松
水の輪や睡蓮の葉に消えにけり

雪ごけ

豊田孝三

雪どけの道や昨夜の火事の跡
霜の朝息かけて見し松の朝
家焼けて骨ばかりなり冬の月
春淡し地震する夜の月の色
芍薬のおくれ咲きけり五月晴
猫に石打てば尙鳴く春夜
櫻散つて河水早き五月かな
戸を閉めてしばし聞きゐる蛙かな
紅提灯の静かにゆれて朝櫻
柳若葉して河筋明き夕哉
初夏やイチゴの味の眞新し
蜘蛛の巣に蜘蛛休み居る暑さ哉

梅が香

深尾喜陸

梅が香のひくく漂ふ春雨の宵
つばくろが初めて通る若柳
舟歌が流れ流れて河下る
とんぼ飛ぶ續く河原のひでり哉
てら／＼と油の海を蒲帆行く
蟬の聲今一しきりなり夕立あと
山越えば里の白壁に夕日はゆ
晝さがり峠の茶屋の縁ぬくし

谷川の青葉のかげに鮎光る
瀧壺の青味を喰ふ鮎青し

夜沈沈

北村彌一郎

しら髪をこり／＼もんで月見かな
茶千本畑のやみにみゝすなく
舟一つ岬を越えて暮れにけり
みづ／＼し苗芽の折れる音のする
あか金の屋根にとんぼの羽光り

床牀吟

曾我繁三

今日も又藥をたまふ母の顔
泣きにけり母の心のしのばれて
木枯の窓の障をゆする音
來診を待ち居る床の心病み
今はさて藥のにがさ慣れにけり
寒空や身に沁む秋の肌衣

車窓吟

(二・七・二三終業式當日)

宗宮復一

窓越へて汽車の中までしぐれ来る
登山者を待つ顔に見ゆ伊吹山
むら雲の駆け上り行く峠の方
かしはばら乗る人僅か三人なり
國境を全速力で走る汽車

月夜の風

吉川文一郎

冬枯の木屑掠める月夜風
萱の穂は月の小風に揺れにけり
枯草の赤き實風に揺れるたり
忍びやかにすゝきの實飛ぶ山路かな
蜘蛛の巣にとまる木の葉や秋晴るる

秋の雑吟

園 凌然

山の端を口笛吹いて秋の暮
山寺の鐘澄み聞ゆ秋の暮
窓により空を眺めて星数ふ
稻刈りて明るき日を眺め居り
白壁に影を作れる白牡丹

山

夏の海ポートヨットの馳せちがひ
此朝のねむさにまかせ八時まで
うすらむや東の空の朝の山
山の頂涼しい風の肌通り
落陽に紫に染む西の山

雑吟

川 澄健一

電線の地上にたれし雪の朝
ぼんやりと霞のかゝる伊吹山
鏡餅ひゞの入りたる寒さかな
こはいほどするは氷の上
麥畑に陽炎上るや春うらゝ

平野 寛

また秋かこほろぎの音のかしましき
初秋や稻の穂たわゝに風わたる
夕立やきりの葉音のおびたゞし
盆の日やほゝづき供へ拜みけり
水まいて一人で庭を眺め居り

夏

夏 川省吾

むくく／＼と夕立雲や山の上

夏の日

岡 庭博

夏の朝櫓音靜かにひびくなり

涼風や彼方の空に花火見ゆ
雲の嶺彼方の山を包みけり
夏の午後木陰に眠る人の影
湯に入りてこほろぎの聲聞居たり

すみわたる月の木影に虫の聲
日盛を鳴く蟬の聲かしましき
草むらにきり／＼す鳴く今日の朝
朝まだき聲はさえけり鰯うり

四季

木 村三雄

舟歌や菜種の花にかくれけり
五月晴風のみこめり鯉のぼり
夕立やすぎて青葉のさんざめき
白うちはすだれの陰を見えかくれ
秋まなか尾花のすそにとんぼ飛ぶ
雨に暮れて野澤のはての暗さかな
雪さらゝ圓窓白き寒夜かな
鶯や梅一りんにかしげ顔

秋

中 村誠太郎

すゞ風にそよぐ青田の實かな
すゞ風や青葉のそよぎもゆるやけし
秋風や木の葉かけゆく村の道
秋の日に光る田の面の實かな
雨はれて木の間にしげきせみのこゑ

松虫

藤 野知三

松虫の鳴く聲すゞし秋の月

秋

組 田重嘉

ホロ／＼とかまどにも鳴く虫の聲
夜更けて虫の音ひとり聞きて居り
虫の音に亡き友思ふ夜淋し
鈴虫の聲すき通る月冴ゆる夜